『名古屋都市計画公園』の計画理念

THE PLANNING CONCEPT OF THE “MASTER PLAN OF PARK IN NAGOYA”

向口 武志*

Takeshi MUKAIGUCHI

This paper discusses the “Master Plan of Park in Nagoya”, which was established in 1925 and preceded the other local cities, through its relationship with the geography, the historical sites and the city planning. This plan aimed to preserve the small topographical undulations in the flat landscape of Nagoya, that is, plateaus, historical sites, ponds, and woods, from the land developments. All sites were connected by the “Master Plan of Street Network in Nagoya” established in 1923 to form a network of existing places of interest scattered around the suburb.

Keywords : *park, city planning, Nagoya, Tsutomu Kanou*
公園, 都市計画, 名古屋, 狩野 力

はじめに

「名古屋都市計画公園」(以下「都市計画公園」)は1925 (T14) 年 1 月に内務省に提出され, 実地調査を経て1926 (T15) 年 1 月に原案中 1 ケ所を削除, 24 ケ所の都市計画公園が決定された¹⁾。その後, 名古屋市では本計画に基づいた計画の新設・拡張が行われ, 当初は土地区画整理組合等の寄付による土地区画整理事業, 戦中は防空都市計画に基づく都市計画事業において実施された。また戦後は戦災復興土地区画整理事業と軍用地の転用等による整備が進められ, 現在の名古屋の公園が形作られている²⁾。佐藤 昌によれば本計画は総合公園計画としては1903 (M36) に東京の市区改正新設計に次いで決定されたもので, 地方都市における総合公園計画の先行例の一つである³⁾。こうした公園計画が日本の近代都市計画においてどのような理念の下に位置づけられ, どのように実施されたのかは, 日本の近代都市計画を考える上で極めて重要な課題であろう⁴⁾。本稿では「名古屋都市計画公園」の理念を用地の選定条件から検証し, 近代名古屋における都市計画と公園との相関を考察するものである。

「名古屋都市計画公園」は街路網・運河網と並び「公園網」と称された⁵⁾。その背景にはパークシステムの訳語である「公園系統」⁶⁾の理念が影響するところが多い。「理由書」によれば, 計画は「将来公園系統上其ノ根幹ヲ為スモノ」であり⁷⁾, 都市計画区域の「公園系統」を形成する上で基幹となる 1 万坪以上の公園配置であった。越沢明によれば都市計画地方委員会に「公園系統」の策定を促した嚆矢として1924 (T13) 年の内務省で開催された都市計画主任会議における「公園系統計画根本調査」があげられ⁸⁾, 都市計画区域の全体にわたる官有地・森林・地価等の調査を下に, 都市の発展による空地の減少, 地価の上昇に先行した「公園系統」の確立を目的とした⁹⁾。その後, 名古屋に続き, 1928 (S3) 年には大阪で, さらに長野・岐阜で総合公園計画が策定され¹⁰⁾, 名古屋における事例は戦前の「公園

系統」を考察する上でも重要な対象のひとつである¹¹⁾。

本計画は都市計画愛知地方委員会の公園担当技師, 狩野 力¹²⁾ (T10~S7在職) により作成された。24 ケ所の指定地 (以下「指定地」) は民有地を多く含み, 官有地の地積に限定されない選定が行われたといえる。狩野によれば選定に際して「充分踏査の末現在の土地の状況は元より地域制, 道路網, 運河網等の計画をも参酌」した上で, 「都市風致のためにも保存すべき水辺地, 樹林地の優秀なもの, 神苑, 史蹟・名勝中よりその保護修飾価値のあるもの」を選択し, さらに市街地にある「公園として開発するのが適当と思われる, 例えば旧来墓地の様なもの」を加え, 「地域内の何れの部分の土地からも, 約半里の距離を歩めば到達出来る」ものを指定した¹³⁾。本稿の第 I 章では総合公園計画である計画全体の目的を公園の種類・配置, 用地取得から検討する。第 II 章では狩野の選定方針を基に選定対象となった「都市風致のために保存すべき」, 「保護修飾記念の価値」場所に着目し, 策定時の地理, 史蹟・名勝との関係から選定条件を検証する。第 III 章では選定の際に参照とされた都市計画愛知地方委員会による街路・運河・用途地域との相関から都市計画全体における公園計画の位置づけを明らかにし, 策定時の「公園系統」について考察を加える。なお, 分析にあたって主要な地図資料として, 計画時に作成された i) 「名古屋都市計画街路網及運河網並公園配置図」, ii) 「名古屋都市計画公園参考森林分布図」, iii) 「名古屋都市計画公園参考公有地調査図」, iv) 「名古屋都市計画公園参考地価等級図」を用い¹⁴⁾, その後の変遷については「名古屋都市計画公園並風致地区配置図附緑地配置図」を参考とした¹⁵⁾。

I. 「名古屋都市計画公園」の概要

I-1 名古屋の公園計画前史

1937 (S12) 年での名古屋市の公園総面積は37万余坪 (122ha), 人

* 名古屋大学大学院工学研究科建築学専攻 大学院生・工修

Graduate Student, Dept. of Architecture, Graduate School of Engineering, Nagoya Univ., M. Eng.

ロ一人当たりの公園面積は6大都市のなかで最も高かったが¹⁶⁾、「都市計画公園」が指定される以前の1925 (T14) 年での市内の官有公園は鶴舞・中村・那古野山公園の3ヶ所、約8万余坪に限られていた¹⁷⁾。その内の鶴舞公園は72,423坪の市内最大の公園であり¹⁸⁾、名古屋市東部の精進川の改修による土砂により埋め立てられた敷地に1907 (M42) 年11月に開園し、1908 (M43) 年の第10回関西府県連合共進会にて整備された。中村公園は豊臣秀吉宅址といわれる土地に1885 (M18) 建立された豊明神社を中心とした公園であり¹⁹⁾、中村旧蹟保存会が寄付した用地を愛知県が整備し、1902 (M35) 年に5,000余坪が開園した。1908 (M43) 年には第10回関西府県連合共進会の開催に際して拡張され10,150坪となり、運動施設等が加えられた。一方の那古野山公園は270坪に過ぎない小公園であり²⁰⁾、旧市内の寺町である大須に位置した。これは1876 (M9) 年に太政官布達により設置された浪越公園(2,095坪)の一部であり、浪越公園が1906 (M39) 年に廃止された時に一部が名古屋市へ移管され、1911 (M44) 年に那古野山公園として開園した。

こうした単発的な公園の整備に対して1911 (M44) 年に設置された市区改正調査会では「公園ならびに街園設置の件」として名古屋市全体にわたる公園計画が審議された²¹⁾。ここでは既存の鶴舞公園を中央公園とし、市内に小公園19ヶ所の配置と主要幹線道路に交差点広場である「街園」の設置が検討され²²⁾、1918 (T7) 年6月の市区改正条例準用後、幹線街路整備に伴い数ヶ所の「街園」が整備されたが、小公園計画が実施されることはなかった。小公園計画の計画地は中村・那古野山の既存公園と寺院境内地4ヶ所への指定を含んだが、その大半が大まかな地名が示されたのにとどまり、「都市計

画公園」との相関をみれば計画地は既存公園である鶴舞・中村公園と建中寺の境内のみと直接的な関連はみられない。

1920 (T9) 年に都市計画愛知地方委員会が設置され、幹事黒谷了太郎の下で都市計画の策定が進められた。1921 (T10) 年に狩野が着任し、以後公園計画に関する調査が行われたが、1922 (T11) 年刊行の『都市計画要鑑 第1巻』には名古屋の公園計画について「現存ノ公園ノ外四五ノ勝地ヲトシ公園トナサンコトヲ計画シツアルノ外尚未ダ根本的ニ其ノ系統ヲ調査スル至ラズト雖モ其ノ計画ハ都市計画ノ上頗ル重要ナルヲ以テ既ニ其ノ道ノ技師ヲ聘シ其ノ根本調査ニ着手セントセリ」とあり²³⁾、狩野による調査に先立って「四五ノ勝地」が候補地として計画されていたことが伺える。『愛知都市計画の梗概』(1924年)には「児童遊園及公園見込地」として児童遊園34ヶ所と公園10ヶ所の計44ヶ所の位置と面積が紹介され²⁴⁾、「四五ノ勝地」はこれらにほぼ相当すると推測することができる。44ヶ所の内6ヶ所は後の「都市計画公園」に含まれるが、計画の4割は社寺境内への指定であり²⁵⁾、1889 (M22) 年案の東京市区改正設計に類した計画であったといえる。

I-2 公園の種類とその配置

「都市計画公園」の総面積は1,691,900坪(560ha)、都市計画区域内人口の一人あたり1.4坪に相当した²⁶⁾。この総面積は都市計画区域の3.4%にあたり²⁷⁾、狩野によれば「大体英国工業都市の割合にほぼ近い」値を目安として総面積が算出された²⁸⁾。こうして算出された面積は24ヶ所の「指定地」に割り振られ、「理由書」によればそれらは面積規模より以下に分類された²⁹⁾。(図-1)

① 「自然公園」 (1ヶ所、計810,000坪)

図-1 「名古屋都市計画公園」と街路網・運河網の配置

図-2 「名古屋都市市街地発展図」

② 「五萬坪以上公園」 (5ヶ所, 計420,000坪)

③ 「一萬坪以上公園」 (18ヶ所, 計461,300坪)

これらは前述したように「将来公園系統上其ノ根幹ヲ為ス」基幹公園であり, 1万坪以下の公園は「将来の計画ならびに土地開発の都度造成」する予定であった。

一方, 1924 (T13) 年に開催された都市計画主任会議における都市計画愛知地方委員会が提示した「公園面積決定の標準」では, 総面積は人口一人あたり1.5坪を目安とし, 公園の種類とその最低面積は以下に分類された³⁰⁾。

- ① 「自然公園」 (標準なし)
- ② 「大公園」 (5万坪以上)
- ③ 「小公園」 (1万坪以上)
- ④ 「界限公園」 (1千坪以上)
- ⑤ 「児童公園」 (5百坪以上)
- ⑥ 「公園道路」

「理由書」の分類と比較すると「都市計画公園」は後者の「自然公園」・「大公園」・「小公園」を対象とし, 「五萬坪以上公園」は「大公園」, 「一萬坪以上公園」は「小公園」に準じていた³¹⁾。(表一1)

「大公園」5ヶ所の配置に着目すれば, 既存公園の拡張であった鶴舞公園を除く1, 6, 18, 25号の4ヶ所は「小公園」より郊外に位置した。黒谷の太郎は公園地を「市内小公園」・「市内大公園」・「郊外公園」に分類し³²⁾, この黒谷の分類に基づけば鶴舞公園は「市内大公園」として, 他の「大公園」4ヶ所は「自然公園」と同じく「天然の風致を鑑賞」を目的とした「郊外公園」に相当したといえる³³⁾。これら「郊外公園」は都市計画区域の外周に配置され, 区域を保全するものであったが, 18号のみは区域の内に配置された。18号より東の八事丘陵地では都市計画愛知地方委員会の主導の下に丘陵地の地形・樹林・湖沼等を積極的に保存した住宅地の開発が着手されつ

つあり³⁴⁾, 18号は市街地と風致に富んだ丘陵地の緩衝地として位置づけられたと指摘することができる。

「小公園」18ヶ所は誘致距離を満たしながら市内にはば一様に配置された。策定時の地価をみれば³⁵⁾, 「小公園」は一坪あたり50円以上の土地と25円未満の地価低廉な土地への配置に分けられる。8, 13, 20, 21号にみられる前者は, 莫大な用地取得費を必要としながらも市街地の公園整備を図った計画である一方, 多数を占めた後者は, 土地区画整理事業による宅地化に先んじて郊外の統制を目的としたものであった。(図一2)

I-3 用地取得

都市計画愛知地方委員会は公園指定地内における建築物の新築は原則として許可しない意向を出来る限り周知したというが, この建築制限に対する法的根拠はなく³⁷⁾, 策定時に「指定地」内にあった1,069軒の家屋は1936年には1,495軒に増加した。また用地取得に対する財源の用途はなく, 「指定地」の早急な公園化は策定当初からきわめて困難であった。

総合公園計画の早急な樹立が必要であった背景として「理由書」には, 「近時勃興シ来レル民間土地開発事業ノ多クハ目前ノ利害ニ驅ワレテ風致ノ荒涼ヲ意トセス市民永遠ノ損失ヲ招来スルコトナキ保シ難シ」とあり³⁸⁾, 計画の策定は民間土地開発に先行した風致保存を目的とした。また第14回都市計画愛知地方委員会の議場では, 用地取得に対して「区画整理組合ニ於テ進ンテ或ル一部ノ土地ヲ提供シテモ宜イヨウナキブンモアリマス」と当初より土地区画整理組合からの土地提供が見込まれていた³⁹⁾。策定時には前述した八事丘陵地の住宅地開発に見られるように土地区画整理事業の中での風致保存が取り組みられ, 「都市計画公園」はそうした土地区画整理事業を活用することで用地取得を目論みながら, 郊外において纏まった規模の公園地を先行して指定することにより積極的な風致保存の実現が図

表一1 指定地の概要・選定条件・都市計画等³⁶⁾

名称	指定地の概要				選定条件			都市計画・交通機関			『尾張名所図会』 ³⁶⁾
	地名	面積(坪)	種類	地価(1坪)	地形 ⁱ⁾	水辺・樹林	史蹟・名勝 ⁱⁱ⁾	用途地域	幹線道路	鉄道	
1	鴨浦	100,000	大公園	3円以上	低地	庄内川河口		工業	13間半		
2	土古	24,000	小公園	3円以上	低地			工業	13間半		
3	小碓	18,000	小公園	3円以上	低地	庄内川自然堤防		住居	13間半	築地電軌	
4	荒子	11,000	小公園	10円以上	低地	荒子川自然堤防	荒子城址	工業	13間半	下一色電車軌道	
5	篠原	18,000	小公園	10円以上	低地			工業	13間半、18間		
6	横井山	52,000	大公園	3円以上	低地	庄内川自然堤防	横井山砂丘	住居		国鉄/関西本線	
7	中村(既存)	32,600	小公園	10円以上	低地		妙見寺・常泉寺	住居		中村電気軌道	(太閤屋敷)
8	白川	22,200	小公園	200円以上	低地			商業	18間		大林寺、他
削除		16,800	小公園	100円以上	旧市内	名古屋城外堀		商業		瀬戸電気鉄道	
10	押切	10,500	小公園	10円以上	低地			住居			
11	庄内	23,900	小公園	3円以上	低地	庄内川自然堤防		(未指定)	13間半		稻生堤
12	志賀	34,500	小公園	3円以上	低地		平手政秀宅址碑	住居			平手政秀宅址
13	建中寺	34,500	小公園	50円以上	旧市内		建中寺	住居			建中寺
14	長母寺	28,600	小公園	3円以上	低地	矢田川自然堤防	長母寺	工業		瀬戸電気鉄道	長母寺
15	城山	39,000	小公園	10円以上	第1次丘陵		末森城址	住居			
16	東山	810,000	自然公園	3円以下	第1次丘陵	池沼、御料林		住居	13間半		東山の春興
17	鶴舞(既存)	85,000	大公園	50円以上	第2次丘陵		八幡山古墳	住居	13間半	国鉄/中央線	
18	萩山	73,000	大公園	3円以上	第2次丘陵	山崎川、鼎池		住居	13間半		鼎池堤端の秋萩
19	田光	28,800	小公園	10円以上	第2次丘陵	田光池、保安林	多喜城址	住居		愛知電気鉄道	(多喜城址)
20	熱田	19,600	小公園	100円以上	旧市内			住居	13間半	国鉄/東海道線	熱田神宮全図
21	断夫山	22,500	小公園	50円以上	旧市内		断夫山古墳	住居			鷲峯山より汐干を望む
22	呼続	26,600	小公園	3円以上	第2次丘陵	学頭池、保安林		住居	13間半	愛知電気鉄道	呼続浜古覧
23	笠寺	13,800	小公園	3円以上	第2次丘陵		笠寺観音	住居		愛知電気鉄道	笠寺
24	道德	25,600	小公園	10円以上	低地			工業		愛知電気鉄道	
25	鳴尾	110,000	大公園		低地	埋立予定地		工業			

られた。

狩野によれば、公園地の指定後には「従来郊外地に散在せる樹林地、溜池、其の他官有地等は土地開発事業の財源」としての破壊を免れ、強制力のない建築制限にも関わらず指定による効果はあったという⁴⁰⁾。財政事業から都市計画事業としての用地収得は滞ったが、1931 (S6) 年には狩野による指導の下に土地区画整理組合によって12号の一部が志賀公園として開園し⁴¹⁾、以後、一部の「指定地」で耕地・区画整理組合の出資による民営の公園や、用地・整備費の大半が寄付により賄われた市営公園が開設された。また1937 (S12) 年には19号が運動公園として国庫補助を受け、名古屋市の公園事業としては初めて都市計画事業において整備されたが、その用地の8割は耕地・土地区画整理組合の自主的な寄付によるものであり、郊外に配置された公園の実現には組合や地主の公園並びに風致保存に対する理解が不可欠であった⁴²⁾。

II. 指定地の選定条件

II-1 地理的条件

旧都市計画下の名古屋市の地形をみれば、旧市街地が位置する名古屋台・熱田台を中心として、東部には千種台・御器所台、さらに東南部の笠寺台へと一連の台地が続き、これらの東側には八事丘陵が市域を形成していた。一方、北部から西部へと低地が海岸までならかに広がり、市域は庄内川に圍繞されていた⁴³⁾。

こうした地形は石川栄耀により海拔に基づき以下のように分類された⁴⁴⁾。

・「第1次丘陵」	66m (80—51m)
・「第2次丘陵」	17m (25—7m)
・「旧市内」	11m (最高)
・「低地」	4m

分類に基づき「指定地」と樹林地・水辺との関係をみれば、15、16号は「第1次丘陵」にあたる八事丘陵に位置している。八事丘陵は豊かな樹林に覆われ、特に「自然公園」を意図した16号では御料林とその谷地にある灌漑池の点在した湿地が選定され、起伏に富む丘陵地の地形を包括した。

18、19、22、23号は「第2次丘陵」にあたる御器所台・笠寺台に位置している。18、19号は御器所台南端にあり、18号は山崎川河岸の狭長な谷と河岸に隣接した「鼎池」を含み周囲は萩の群生地であった。19号は台地端部の高台と灌漑池を含み、池の東は森林法による保安林であった⁴⁵⁾。22、23号は古来より海に臨む景勝地が点在した笠寺台にあり、22号は19号の地理的要素と同様に台地端部の高台と灌漑池、並びに保安林を内包し⁴⁶⁾、23号は台地南端部の高台の景勝地であった。ここでは地形が変化し、池沼と樹林が残る台地の際への着目が伺える。(図-3、4)

8、13、17、20、21号は「旧市内」にあたる名古屋台・熱田台に位置している。ここでは地形との関係は特に見られないが、指定地に多く含まれた寺院境内は市街地に残された樹林地であった。また21号は含まれた断天山古墳は古くから林叢に覆われていた⁴⁷⁾。

1、2、3、4、5、6、7、10、11、12、24、25号は「低地」にあたる低湿地に位置している。1、25号は市域の外周を流れる庄内川・天白川の河口にあり、25号は埋立予定地であった。3、4、6、11、14号は庄内川等の堰堤・自然堤防を含み、特に6号では河

畔砂丘(横井山、標高11.8m)が形成されている⁴⁸⁾。また草案には「公園道路」が庄内川沿いにあったことから⁴⁹⁾、「低地」において砂州と松並木が続いた庄内川の河岸景観の重視が見受けられる⁵⁰⁾。

水辺との関係に着目すれば、「旧市内」を除いた多くの「指定地」では池沼・河岸・海岸がその周囲を含めて選定された。黒谷了太郎によれば、都市計画は「水面の保存」と「沿岸地の回復」を鑑みたと上で、郊外にある小川や池沼は「公園系統に編入して沸々其の沿岸を収用し、公園なり、公園道路」として、河川の河岸は「遊歩地(エスプラネード)或は逍遙道路(プロメネード)」として、海岸は「海濱公園なり逍遙地」として計画することが必要であり⁵¹⁾、選定における水辺の重視は黒谷のいう水面保存の現われであった。特に東部の丘陵地の池沼や臨海地への選定は市区改正調査会での設計案や「児童公園及公園見込地」では見られなく、狩野の調査により見出された用地であったと指摘することができる。

樹林との関係は丘陵地において顕著であり、「第1次丘陵地」では丘陵地の豊かな樹林帯が「自然公園」として選択された。「第2次丘陵」では台地の際に残る樹林が池沼と共に選定され、その樹林の一部は保安林であった。狩野は保安林を「郷土美」破壊の食いとめ役として評する一方、大正初期から多くの保安林の指定が解除されたことにより、その有効性が失われつつあることを危惧していたが⁵²⁾、策定時に市街化が進展しつつあった「第2次丘陵」において、保安林の中でも池沼に隣接した樹林に着目し、水辺と樹林の一体的な保全が図られたといえよう。(図-2、4)

II-2 史蹟・名勝との関係

名古屋は近世初頭に新たに建設された城下町であるが市内には城址・古戦場が多く、大小の古墳が台地上に点在していたという⁵³⁾。愛知県の史蹟保存は1913 (T2) 年の陸軍大演習を契機に具体化し、1915 (T4) 年5月には愛知県臨時会議において始めて予算が計上された⁵⁴⁾。1919 (T8) 年の「史蹟名勝天然記念物保存法」施行後、1922 (T11) 年6月には「愛知県史蹟名勝天然記念物調査会」が発足し、翌年から『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告書』が発行された⁵⁵⁾。報告書に記載された名勝・天然記念物と「指定地」との関連は特に認められないが、都市計画区域内に含まれた史蹟8ヶ所の中で古墳2ヶ所・城址1ヶ所・宅址2ヶ所の計5ヶ所が「指定地」に取り込まれた。これらは史蹟8ヶ所の中でも規模が大きく、その保存には史蹟周囲も含めて広大な用地が必要であり、都市計画公園の指定による保存が図られたと考えられる。

一方、「指定地」の半分以上が『尾張名所図絵 上・下巻』(天保12、明治13年)で紹介され、旧来の名所との関係を指摘することができる。また1924 (T13) 年に纏められた『名古屋市長史蹟名勝天然記念物調査要領』には名古屋市内における96ヶ所の史蹟・名勝・天然記念物が報告され、大正末期における市内の史蹟・名勝の全容をつかむことができる⁵⁶⁾。これによれば「指定地」には前述した5ヶ所の史蹟以外にも史蹟・名勝が内包された。「都市計画公園」に先立った「児童遊園及公園見込地」44ヶ所に着目すれば、44ヶ所のうち史蹟・名勝と結びつくのは4ヶ所であり、3ヶ所は後に「指定地」に含まれた。残る1ヶ所は東部丘陵地の風光に優れた高台であったという史蹟「琵琶ヶ峯」であるが、「都市計画公園」では「琵琶ヶ峯」に隣接した遊山地「鼎池」を中心とした18号が配置され、史蹟・名勝の選択においても水辺の重視が伺える。また狩野の調査により加えら

れた史蹟・名勝として城址があげられる。例えば4号は尾張四観音として賑った荒子観音寺でなく、近接した荒子城址を含む指定であった。城址は『愛知都市計画の梗概』（1924年）において都市計画区域内の城址が「風致」として紹介され⁵⁷⁾、平坦な名古屋における微高地として着目されていたことが伺える。狩野は「史蹟名勝天然記念物保存法」による保存政策を「国家的に学術的に保存の価値あるものが保存され得るだけであって地方的に郷土的に価値ある樹林風致や史蹟の保護は到底覚束ない」と評し⁵⁸⁾、これらの史蹟・名勝は狩野のいうところの「郷土美」を満たすものであったといえよう。

「指定地」は多くの社寺とその境内が含まれていた。しかし、神社を含むものは希であり、多くは寺院・寺院境内への指定であった。これら寺院を含む計画地は、単一の寺院・寺院境内への計画と、寺町等の寺院集積地への計画に大別することができる。前者には13、14、23号があげられ、既存公園の拡張部が寺院である7号もこれに類する。ここでは広大な寺院境内地を利用した公園化が図られ、

1889（M22）年案の東京市区改正設計での公園計画が広大な寺院境内地へ指定されたことと類似する⁵⁹⁾。一方、後者には8、20、21号があげられ、旧来の市街地内の寺町と墓地が街区ごと指定された。8号は市街地の中心に最も近い寺町が選定され、20号は熱田神宮を囲む寺町の開発による神苑地の整備であった。また21号は尾張3大墓地であった北山墓地を指定し墓地移転による断夫山古墳周辺の整備が図られた。寺院・墓地の移転問題は既に市区改正調査会においても検討され⁶⁰⁾、1915（T4）年発行の『名古屋市史 社寺編』には「佛寺の地積は将来都市発展の上に重大なる関係を有する」と都市問題として寺院が扱われた。明治初期の公園に関する太政官布達には社寺上地令布達後の官有地となった社寺境内地の荒廃を危惧したものであったが⁶¹⁾、「都市計画公園」は民有地である寺院・墓地を計画に含めることで、公園化による街区全体の一体的な再開発を目的としたという点で評価することができる。

図一三 「都市計画街路運河並公園配置図」の「第2次丘陵」部分

図一四 「第2次丘陵」の地理、史蹟・名勝

Ⅲ．都市計画における位置づけ

Ⅲ－１ 街路網・運河網、用途地域との関係

名古屋市では「都市計画公園」の決定と同時に「名古屋都市計画追加街路網」（以下「追加街路網」）が都市計画決定された⁶²⁾。これは1924（T13）年6月9日に認可された「名古屋都市計画街路網」を郊外へ補足したものであり、具体的には南部の「東西築港埋立地」とその「背面工業地帯」の連絡を目的とした「築港計画将来ノ施設ト相俟テ重量ナル交通系統」と、「東部丘陵地」の「名古屋市ニ於ケル唯一理想ノ住宅地」の利用増進を目的とした「地形ニ随イ適度ノ曲線ヲ設ケ勾配ヲ緩和セル」道路との2系統に大別することができる⁶³⁾。「追加街路網」と「都市計画公園」との相関をみれば、港湾地域では運河網によって分断されていた「大公園」の1、25号が連絡され、東部丘陵地では15、16、18号が緩やかな曲線道路により街路網の中に組み込まれた。

次に、「追加街路網」によって補完された街路網と「指定地」との取付きに着目すれば、指定地内に道路が取り込まれたもの、道路に接するもの、道路とは関係ないものの3つに分類できる。これらの配置を検証するにあたり、地形・史蹟等の位置を規定する条件がなく誘致距離から選定された2、5、10、24号に着目すると、2、5、24号は用途地域では共に工業地域内にあるが、2、5号は幹線道路に接道しているのに対して24号は幹線道路から切り離されて計画された。これは24号の周辺が純粋な工業地域でなく、「工場住宅地」として開発が行われたことから、街路網との関係からいえば住宅地域内に計画された10号に類似した配置であると指摘することができる⁶⁴⁾。

一方、同じく住宅地域内に計画された16、18、22号は道路に接している。これらの計画地は東部丘陵地に位置し、特に16号の「自然公園」と18号の「大公園」は道路を指定地内に積極的に取り込んでいた。ここでの道路は前述した「追加街路網」において地形的には台地・丘陵地の際に沿って計画されたもので、同様に台地・丘陵地の際に配置された公園を連絡し、丘陵地に計画された「名古屋市ニ於ケル唯一理想ノ住宅地」⁶⁵⁾に適う公園として計画されたといえる。

運河網に着目すれば、既存運河に隣接する21号を除き、新設運河網に隣接するものはなく、「指定地」との関連は特に認められない。前述した様に「都市計画公園」は郊外に残る池沼を指定し、庄内川流域を評価する等、郊外に残された既存の水辺を重視したが、運河網は既に汚染が著しかった都市内河川の拡幅でもあり、新たな都市内の水辺への無関心は運河景観に対する評価が必ずしも高くなかった現われともいえよう。

Ⅲ－２ 公園系統

「都市計画公園」は「将来公園系統上其ノ根幹ヲ為スモノ」と位置づけられ、黒谷了太郎は「公園は運動場と共に、一定の計畫の下に所謂公園系統」により統一し、「公園道路やプールパールを以て連結すれば理想的である」とした⁶⁶⁾。1928（S3）年に決定された「大阪都市計画公園」では「公園道」約20kmが計画され⁶⁷⁾、個々の公園の連結が図られたが、「都市計画公園」ではこうした「公園道路」は決定されなかった⁶⁸⁾。その草案には名古屋市を取り囲むように庄内川河岸の堰堤を指定した「公園道路」といえる計画があったというのが⁶⁹⁾、これは内務省の審議において土木局との権限問題から一般道路計画により実現を図る余地があると計画案から削除された。また

欠番である9号は名古屋城外堀に面した道路沿いに計画された帯状の公園であり、狩野は1925（T14）年の第14回都市計画愛知地方委員会会議において市街地の「美観街路」として利用するとしたが⁷⁰⁾、宅地買収費と帯状の公園と街路との差異などが問題となり保留となった。

「公園系統」はパークシステムの訳語であり、石井幹子によればパークシステムとは「市街化に先立ち、公園と広幅員街路を骨格とする基盤整備を行い、良質の市街地整備を計画的に誘導し、あわせて、水源地、湖沼、河川、段丘崖、良好な樹林地等の保全」を図ったものであった⁷¹⁾。しかし、1923（T12）年8月に都市計画東京地方委員会によって立案された東京公園計画では、「公園系統」は「主トシテ郊外放射環状道路並ニ交通機関ノ便ヲカリ必要トスル場合道路公園ヲ以テ公園相互ヲ連絡」するとあり⁷²⁾、大正末期の都市計画地方委員会の公園計画における「公園系統」は、広幅員街路による公園の連絡を理想としながらも⁷³⁾、財政的な問題等から幹線道路、鉄道などの交通機関による連絡に頼らざるをえなかったといえる。

「追加街路網」の計画幅員は13間半（24.3m）と通常の幹線街路であり、広幅員道路ではない。しかし、その設計趣旨によれば「追加街路網」は「地域制及公園系統トノ調和ヲ相助ケ各機能ヲ發揮」させるものであり⁷⁴⁾、前述したように郊外の「指定地」は「追加街路網」により街路網の中に組み込まれた。また都市計画愛知地方委員会によって策定された「街路網」は路面電車の軌道を見込んだ計画であり⁷⁵⁾、街路網による連絡は同時に「電車系統」による連絡であった。在来の電車路線との関係をみれば3、4、14、19、22、23、24号では路線に近接した配置が見受けられ、電車による連絡が図られたと指摘することができる。「都市計画公園」における「公園系統」は幹線道路と電気軌道等による連絡に終始し、広幅員街路により連絡されたパークシステムが計画されることはなかったが、公園計画と道路計画が同時に作成され、共に機能することで市街化に先行した郊外整備を計画的に進めようとした点で評価することができよう。

結語

以上をまとめると次のようになる。「名古屋都市計画公園」は都市計画愛知地方委員会の公園技師、狩野 力により調査・作成され、将来の「公園系統」の基幹公園となる24ヶ所の都市計画公園配置計画であった。「指定地」は288haにおよぶ「自然公園」と「大公園」により都市計画区域外周の保全が図られる一方で、一万坪（3.3ha）以上の公園が誘致距離を満たしながら都市計画区域全体に配置された。その多くは宅地化が予想された郊外に立地し、土地区画整理事業の進展と共に用地取得を目論みながら、市街化に先んじた郊外の風致保全を目的とした。

選定された用地の特質として、東部の池沼・河岸・海岸地等の郊外に残る水辺地への着目があげられ、それは黒谷了太郎の水面保存への問題意識が大きく反映されたものであった。また史蹟名勝天然記念物保存法に基づく史蹟に加え、その枠組みにとらわれない郷土の史蹟・名勝が選択され、本計画は史蹟・名勝地の保存政策の一環として位置づけることができる。さらに水辺・樹林、史蹟・名勝とその周囲も含めた面的な選定により周囲の特化した地形が保全され、指定地において後に土器等が発掘され新たに史蹟と判明したところも少なくないことから本計画は歴史的遺産の集積地の保全計画

であったといえる⁷⁶⁾。一方、市街地の中心では旧来賑った寺町の公園化が図られ、社会問題であった荒廃した寺院・墓地の集積地は都市計画公園の開発対象とされた。この寺院の公共用地への転用において官有地の地積に限定されない用地の選定が行われ、街区の一体的な再開発が意図された点で評価することができよう。

本計画において「指定地」を連絡する公園道路や広幅員道路は指定されることはなく、いわゆるパークシステムを形成するに至らなかった。しかし、名古屋都市計画公園の決定と共に街路網が追加され、郊外に点在した指定地の幹線街路と鉄道による連絡が図られた。特に風致に富んだ東部丘陵地では公園地内への道路の取り込みが見受けられた。公園計画と道路計画が郊外の市街化に先んじて地形を考慮しながら相俟って策定されたことは都市計画による一体的な郊外統制として重要な事例であろう。また江戸以来の名所・旧蹟に関連した「指定地」は旧都市計画法下の都市計画公園として位置づけられたが、城下町名古屋から伸びる街道沿いに点在していた名所・旧蹟は新たな街路網で結び付けられることで、郊外の周遊ネットワークが形成されたといえる。

これら「指定地」の用地取得・整備が急速に進展するのは戦中の防空都市計画下であり、「都市計画公園」は1940（S15）年に決定された「名古屋都市計画大緑地」の下で小緑地と称され、グリーンベルトを形作る「緑地」の一部と位置づけられた⁷⁷⁾。土地区画整理組合による公園と共にこの防空都市計画下の公園の分析が整備過程を検証するにあたり必要であるが稿を改めたい。

謝辞

本論文の史料収集にあたり愛知県公文書館、（財）名古屋市都市センターの方々の協力を得た。記して謝辞を表します。

【註】

- 1) 本稿は拙稿『「名古屋都市公園網」について』、日本建築学会学術講演梗概集1998年、p.173-174を発展させたものである。
- 2) 戦前における計画の主な変更は1927（S12）年に19号の位置・面積変更、1940（S15）年に一部が削除の上、「緑地」としての再指定、1941（S16）年以降の4ヶ所の追加があげられる。また戦災復興計画では実施の見込みがないものを削除し、軍用地の跡地などを追加した。
- 3) 佐藤 昌『日本公園緑地発達史 上巻』都市計画研究所、1977年、p.235
- 4) 例えば、白幡洋三郎（『近代都市公園史の研究』思文閣出版、1995年、p.167-219）による日比谷公園の研究。
- 5) 例えば『都市創作』第2巻第1号、p.56、1926年誌上。
- 6) 例えば上原敏二『都市計画と公園』（1924年、p.107）によれば、「都市に於ける公園は單獨して存在して居るのでは真に公園としての機能を發揮することは出来ない。之を適當なる状態に聯絡せしめ全公園をある一つの系統の下に有機的に一團として考へ得る様設計布置された時に始めて真に意義ある内容を充實し、市民生活の上に完全に役立ち得るのである。かくの如き系統を公園系統（park system）と稱す」とある。
また本稿では策定時の内務省による公園系統を括弧付けで扱い、一般にいうパークシステムと差異づけた。
- 7) 『都市計画愛知地方委員会会議録 第14回』、p.14、1920年
- 8) 越沢 明「区画整理と3%公園保留理論」『生誕百年記念北村徳太郎公園緑地論集』日本公園緑地協会、p.123-124、1995年、越沢 明「公園緑地計画の展開と近代日本都市計画」『都市計画』176号、1992年。
- 9) 「公園系統計画の根本調査」では公園系統のため1. 官有地調査図表、2. 土地時価図、3. 森林分布保安林及荒蕪地、4. 公園統計の調査資料の作成が指示された。『都市公論』第7巻7号、p.40-42、1924年
- 10) 岐阜市では1929（S4）年3月25日、長野市では1930（S5）年2月7日に総合公園計画が都市計画決定された。
- 11) 先行する研究として戦前公園配置論に関して簗茂寿太郎の研究、「史蹟」

保存の理念に関して西村幸夫の研究、都市計画と公園の相関に関する越沢明の研究があげられる。また、戦前名古屋の都市計画について佐藤圭二らによる一連の研究、郊外住宅地について堀田典裕の研究があげられる。「名古屋都市計画公園」の策定に関しては佐藤 昌による研究（前掲書3、p.179-182）、越沢 明「名古屋の都市計画の成り立ち」（『アーバンアドバンス』6号、名古屋都市センター、p.133-139、1995年）において言及されるものの、その全容は必ずしも明らかになっていない。

- 12) 狩野 力（1892～1934）、1916（T5）年に東京帝国大学農科大学農学科卒業後、明治神宮造営局に入る。1921（T10）年都市計画愛知地方委員会公園技師として名古屋市に赴任。その後1927（S5）年に新設された名古屋市公園課の課長として東山公園に着手した。
- 13) 狩野 力「土地区画整理に依る公園計画の実施」『都市公論』第14巻8号、p.166-167、1931年。因みに、前掲書5）、p.14によれば都市計画愛知地方委員会の議場で都市計画愛知地方委員会幹事、黒川一治が指定地の選定理由を以下のように例示した。①「自然ノ風致ヲ保存スルノニ價値ガアルモノ」（1、3、6、11、16、18、19、22、25号）②「名勝地デ且ツ風致ノ佳イ處」（13、14、23号）③「城址史蹟地デアッテ之ニ裝飾ヲ加エ記念トスルニ足ルモノ」（4、12、15、21号）④「市街地デ将来公園トシテ開発スルヲ適当トスルモノ」（8、9号）⑤「既存公園ノ拡張」、「神苑地ノ保護」（7、17、20号）⑥「誘致距離（半里）を満たすためのもの」（2、5、10、24号）、しかし、「指定地」には一ヶ所に複次的な要素が見受けられ、黒川の例示はその主な理由に過ぎない。本稿ではこの例示を参考とし、各指定地の詳細な検証を試みる。
- 14) i）、ii）、iii）、iv）は『都市計画要覧 第六巻付図』（柏書房、1988年）に再録。また、ii）、iii）、iv）は「公園系統計画の根本調査」による資料と考えられ、図中に1925（T14）年8月調査とある。
- 15) 1940年発行、愛知県公文書館所蔵
- 16) 北村徳太郎「名古屋都市計画公園決定時と狩野課長の思い出」『公園緑地』公園緑地協会、第1巻5号、1928年、p.65-67
- 17) 「愛知縣下の公園」『愛知縣山林会報』43号、p.65、1925年
- 18) 『名古屋都市計画史 上巻』名古屋建設局、p.432-441、1957年
- 19) 浅井正明『中村公園』名古屋市公園緑地協会、1985年に詳しい
- 20) 前掲書18）、p.427-531によれば浪越公園は、江戸期の名所であった清寿院後庭と浅間山神社境内地の社寺境内地を愛知県が公園化したものであり、園内には築山林泉の散策路と飲食店等があったという。
- 21) 前掲書18）、p.473
- 22) 街園は昭和5年以降、幹線街路交差点内等に整備され、芝生広場や休憩施設が作られた。また道路内に点在した広場であり、「公園道路」を目的とするものではない。狩野が課長を勤めた名古屋市公園課が管理したが、戦後の交通増加に伴い消滅した。
- 23) 『都市計画要覧第1巻、大正11年刊』、柏書房、p.223、1988年
- 24) 都市計画愛知地方委員会『愛知の都市計画梗概』、p.155-157、1924年、6ヶ所は指定地の6、12、14、21、22、24号の一部として継続した。
- 25) 田中正太『日本の公園』鹿島出版社、p.221、1974年
- 26) 1928（S3）年大阪市都市計画公園の総面積170万坪であり、名古屋市と同規模であるが、都市計画区域面積の2.5%であった。
- 27) 前掲書13）、p.167
- 28) 因みに、3.4%の根拠として「名古屋の街路と公園」（『都市創作』第2巻第2号、p.53、1926年）には大原研究所「社会政策としての公園」における試算を標準としたとある。
- 29) 前掲書7）、p.14
- 30) 『都市公論』第7巻7号、p.60-62、1924年
- 31) 前掲書28）、p.54によれば指定地は、「天然公園（810,000坪）」、「自然式公園（5ヶ所、420,000坪）」、「小公園（18ヶ所、450,000坪）」に分類され、「五萬坪以上公園」は「自然式公園」とされた。
- 32) 黒谷了太郎『都市計画と農村計画』、p.297-298、1925年
- 33) 因みに武井高四郎「都市の公園計画」（『都市公論』2巻11、12号）によれば Large landscape park or country park を大公園（郊外公園）、Small park or in-town park を小公園と訳した。
- 34) 堀田典裕「八事丘陵における住宅地の形成過程とその空間的特質について—近代名古屋における郊外住宅地開発（II）」日本建築学会計画系論文第471号、p.165-173に詳しい。
- 35) 「名古屋都市計画公園地価等級図」『都市計画要覧付図、第6巻付図』、柏書房、1988年
- 36) i）石川栄耀による分類（註43）に基づき、ii）名古屋市『名古屋史蹟名勝天然記念物調査要綱（写）』における史蹟・名勝、iii）『尾張名所図絵・下巻』、1842年のデータを補完したものである。

- 37) 石神甲子郎「名古屋都市公園指定の効果」『造園雑誌』第3巻第3号, p. 219-229, 1926年また第14回都市計画愛知地方委員会の議場では風致地区の指定による建築規制が言及され1939 (S14) 年には「指定地」その周囲が風致地区として指定された。前掲書7), p.18
- 38) 前掲書7), p.17
- 39) 『都市計画要覧第五巻, 昭和2年刊』, 柏書房, p.78, 1988年 因みに前掲書7), p.14には「名古屋ノ都市計画ハ御承知ノ通り昨年道路網又ハ地域ノ決定ヲ致シマシタ結果, 大分此ノ土地区画整理組合ニ依ッテ道路ノ新設若ハ構築スルモノガ非常ニ多クナッタノデアリマス。然ルニソノ結果色々ノ組合ノ財政等ノ関係モアラウガ, 風致ノ佳イ處, 若ハ名勝地トイウヤウナ處ガ段々ト壊サレテ行クイフトコロガ大体ノ趣旨デアリマス」とある。
- 40) 前掲書13), p.166
- 41) 都市計画事業による公園整備は国庫補助を受けたものであり, それ以前の土地区画整理事業における公園整備は用地・整備費の大半を区画整理組合や地主等の寄付によって賄われ, 不足分が都市計画事業外の公共事業で整備された。また寄付に依らず始めて全てが都市計画事業により整備されたのは1929 (S14) 年5月に決定された21号の熱田神宮公園であった。
- 42) 土地区画整理組合等による公園として11号の庄内公園, 12号の志賀公園, 16号の東山公園, 18号の荻山公園, 19号の田光公園, 24号の道徳公園等があげられる。狩野力「名古屋の公園計画と其の後」『都市公論』第15巻6号, p.80, 1932年
- 43) 名古屋市の地形に関しては名古屋市『大正昭和名古屋市史』地理篇, p.1-9, 1955年を参照とした。
- 44) 石川による「区画整理の特質」(『都市問題』第9巻第4号, 1921年) による分類(下図左)による。また, 地形と海拔との関係は石川の「区画整理の本質」(『都市公論』16巻, p.33, 1932年)による。(下図右)

- 45) 「保安林」は1897 (M30) 年に施行された森林法第3章に基づき指定された。
- 46) 19号に含まれた「保安林」は民有地であり, 22号は国有地を含んでいた。また, 森林法制定当時, 全保安林中79%が民有林であった。西尾 隆『日本森林行政史の研究—環境保全の源流』東京大学出版, p.155, 1988年
- 47) 断夫山古墳は, 江戸時代には禁足地であったが毎年3月3日は登る事が許され, 熱田湯が見渡せる名勝地であったという。
- 48) 名古屋市教育委員会『名古屋の史蹟と文化財』, p.270, 1990年
- 49) 前掲書16) と同じ
- 50) 庄内川下流では遊園地が開園し海水浴で賑わった。3号の上流には1916 (T5) 年に開園した松蔭遊園地が, 下流には1925 (T14) 年に開園した多加良浦遊園地があった。愛知県地方委員会内庭園係「名古屋市近郊に於ける地方鉄道と其の遊園地及び運動場」『都市公論』第14巻8号, p.331, 1931年
- 51) 前掲書32), p.124-137
- 52) 狩野 力「郷土美の保存」『都市創作』第1巻第2号, p.35, 1925年
- 53) 前掲書48), p.84
- 54) 松井 茂「愛知県の古蹟保存方針」『史蹟名勝天然記念物保存協会 第5回報告』史蹟名勝天然記念物保存協会, p.1, 1916年
- 55) 『愛知縣史蹟名勝天然記念物調査報告』は第1巻, 1923年から第6巻, 1928年まで発行された。「史蹟」のうち「指定地」に含まれたものは7号の豊臣秀吉宅址・加藤清正宅址(第4巻, p.1, 4), 15号の末森城址(第5巻, p.19), 17号の八幡山古墳(第6巻, p.1), 21号の断夫山古墳(第6巻, p.1)であった。因みに, 史蹟に関しては『愛知縣聖蹟史1, 2, 3巻』(愛

- 知県, 1919年)に詳細にまとめられた。
- 56) 名古屋市『名古屋市史蹟名勝天然記念物調査要領(写)』, 名古屋市市政資料館所蔵
- 57) 前掲書24), p.164
- 58) 前掲書52), p.34
- 59) 丸山 宏『近代日本公園史の研究』思文閣出版, 1994年, p.28
- 60) 前掲書25) と同じ
- 61) 前掲書18), p.457
- 62) 前掲書7) によれば, 第14回都市計画愛知地方委員会会議にて「大正十四年十一月九日付内務省愛都第二号内務大臣付議名古屋都市計画街路新設及構築ノ件」として「都市計画公園」と同日に審議された。
- 63) 前掲書7) と同じ
- 64) 10・24号では昭和2—3年頃, 土地区画整理組合から指定地の寄付が申し出されたが当時名古屋市には公園課が設置されていなかったこともあり, 名古屋市は寄付を却下した。前掲書36), p.228
- 65) 前掲書7) と同じ
- 66) 前掲書32), p.299
- 67) 「公園道」は平均幅員4.8m程度のものであったという。前掲書3), p.187
- 68) 前掲書9), p.84によれば, 当時の「公園道路」とは「公園と公園とを連絡する道路又は河川海岸水辺山岳丘陵に接する道路を選定」したものであり, 1930年代のアメリカにおける「恩恵的な交通(ドライブ)のためのもの」とは異なる。S. Giegion, 太田 賢『空間時間建築2』丸善, p.918-928, 1969年
- 69) 前掲書16) と同じ
- 70) 掲書7), p.21によれば, 幅30間(54m)ほどの市電の軌道時期に沿った細長い公園であり, 計画地の殆どは民家が建て込み, 実施にはそれらの民家の撤去が必要であった。
- 71) 井手久登編『緑地環境科学』朝倉書店, p.15, 1997年
- 72) 前掲書3), p.267
- 73) 蓑茂寿太郎「わが国における公園配置計画の変遷と特質」『1988年度第23回日本都市計画学会学術研究論文集』, p.209
- 74) 前掲書7), p.50ここでの街路断面は明らかでないが, 掲書書7)から推測すれば関東大震災後の帝都復興計画における25mの街路に相当し, 両側に歩道と街路樹, 中央に電車軌道をもつものであったと指摘することができる。
- 75) 掲書書7), p.70幹線道路には舗装された歩道と街路樹が整備され, 1936 (S11) 年では幅員22m以上の幹線道路86,585mの半分に街路樹が植わっていた。名古屋市『大正昭和名古屋市史』経済編, p.403, 1955年
- 76) 樋口忠彦は『日本の景観』(ちくま学芸文庫, p.226-230, 1993年)において江戸・東京における四季の名所が「山の辺(というか丘の辺)と水の辺との凹凸・變の部分」に集中し, そこでは「人間の棲息地自然景観」と歴史的遺産が「一体化し, そうした場所の保全を指摘している。
- 77) 田治六郎「名古屋都市計画緑地事業概況」『公園緑地』第6巻第8号, p.14-20。また名古屋市の戦中都市計画の先行研究として後藤健太郎, 佐藤圭二「名古屋市における戦中の防空対策が都市計画に及ぼした影響」『1990年度第25回日本都市計画学会学術研究論文集』, p.469があげられる。

【図版出典】

- 図—1 筆者作図, 作図に際して「名古屋都市計画街路網及運河網並公園配置図」(『都市計画要覧』第六巻付図柏書房, 1988年)を下に, 大日本帝国陸地測量部『二万五千分一地形名古屋近傍八, 九, 十, 十二, 十三, 十四号(大正9年測量)』から5, 10, 20, 60mの等高線を抽出した。
- 図—2 名古屋市『大正昭和名古屋市史』第1巻, p.65, 1955年
- 図—3 松岡明文堂「名古屋市全図 都市計画街路運河並公園配置図」(原縮尺1/20,000)の部分
- 図—4 筆者作図, 作図に際して大日本帝国陸地測量部『二万五千分一地形名古屋近傍八, 九, 十, 十二, 十三, 十四号』(大正9年測量)から等高線を『名古屋都市計画公園参考森林分布図』から植生を抽出した。

(1998年9月10日原稿受理, 1999年2月26日採用決定)